

《論説》

「骨」と犠牲式

山内 暁子

古代ギリシアの祭祀研究と史料

古代ギリシア人の儀式に目を向けるとき、まずは文献史料を繙くことになる。古典期にはアテナイにおける史料の集積が著しく、ともすれば Athenocentrism (アテナイ中心主義) との謗りを免れない。しかし、『アテナイ人の国制』によって前4世紀に至るまでの民主政治の進展と制度が詳細に伝えられ、「シュコファンテス (告訴常習者)」が登場するほどの「訴訟社会」であり、デモステネスをはじめとする法廷弁論作家たちの作品が数多く現存するアテナイにおいてさえ、儀式や宗教慣習についての文献は豊富とは言えない。オクスフォード大学でギリシア宗教史を長らく牽引してきたパーカー¹がそうであるように、数量的に乏しい文献を補う作業、とりわけ碑文史料への注力によって、古代ギリシア宗教史の進展が得られている。世紀を跨いで書籍化された古代ギリシアの祭祀をテーマとするシンポジウム²は、さまざまな宗教儀式が「オリュンポスの／クトニオス (大地・地下・冥界) の」領域に帰属するかどうかを検討するものであったが、これもまた、碑文史料の精査によって改めてテーマとなった。このシンポジウムは、文献史料から見える宗教儀式と、暦におけるデータの断片 (神の名・聖域・犠牲獣の指定・獣の価格) の集積において明確な差異が存在するのではないかという仮説を提示した。古代ギリシア人が文献史料に残した言葉からは、「オリュンポスの／クトニオスの」という2つの区分よりも、「神々・不死の／不死でない (すなわち人間・半神の)」という境界線の方が際立っており、しかしながら宗教暦においては、言語の文脈を超えて存在する、祭祀手続き上の区分が存在するのではないか、という可能性を示唆している。

ギリシア宗教史の中でも、動物犠牲を中心として考える時、例えば暦だけでなく、図像史料を検討することも多い。古代ギリシアの最も詳細な犠牲史研究の一つに挙げられるファン・シュトラテンの『ヒエラ・カラ』³は、図像における犠牲式の表象を検討した重要な成果である。古代ギリシア、とりわけアッティカの陶器画には神話伝説だけでなく、市民の日常生活を描いたものも多く、祭壇で犠牲を捧げる人々の姿は重要なテーマの一つである。

また、ウプサラ大学で祭祀研究を進めるエクロスは、悲劇や喜劇を筆頭とする文学作品や歴史書、碑文に刻まれた暦に加えて、壺絵に描かれた表象によって、犠牲式の実態に迫

¹ R. Parker, *On Greek Religion*, Cornell U.P., 2011. 現在は退職し、オクスフォード大学名誉教授である。

² R. Hägg and B. Alroth, eds. *Greek Sacrificial Ritual, Olympian and Chthonian: proceedings of the sixth international seminar on ancient Greek cult, organized by the department of Classical archaeology and ancient history, Göteborg University, 25-27 April 1997*. Distributor Paul Åströms Förlag, 2005.

³ F. T. Van Straten, *HIERA KALA: Images of Animal Sacrifice in Archaic and Classical Greece*, E. J. Brill, 1995.

る仕事を成し遂げている。エクロスが近年指摘するところは、犠牲式に関わる史料で、現在も有意に増大しているのは「骨」だけである、というものだ⁴。文学作品や法廷弁論といった史料は、そこで表現されているものが「現実か理念か」という判断が難しいが、文献や図像などの「表象」が語ることが理念であったとしても、聖域に埋もれた「骨」はどうだろう。「骨」ならば、古代ギリシア人の祭祀行動の「実際」について語ることはできるのではないだろうか。

「骨」を語る資料として、ヘレニズム時代のアイトリアのアルテミス聖域の禁令を見よう。「聖域内に骨を捨てないこと」⁵すなわち、聖域内には、かなりの数の犠牲獣の骨が遺棄されていたのではないだろうか。おそらくは、禁令を出して注意を喚起するほどに、聖域に骨が散乱していたのだろう。犠牲式の文献史料を再構成してみると、犠牲獣は喉を切られて絶命した後に、内臓占いのために肝臓が検分され、さらに太ももの肉が串刺しにして焼かれ、しばしばその犠牲式を執り行う神官の役得分となった。古代ギリシアにおける神官とは、いわゆる宗教の専門的な専従者ではなく、「役人」と同様に持ち回り任期で就任するものがほとんどであった。家の中でも犠牲式は執り行うものであるし、中層以上の市民である成人男性は「神官」として犠牲式を執り行う立場にあったと想定できる。犠牲の後にその場で宴会が行われることもあるし、茹でた肉を分配して持ち帰ることもあった。動物を解体して肉をとる以上、骨はその場においてゴミの1つであったと考えて良いだろう。エクロスはこういった骨を史料として歴史を考える領域を、「動物考古学」の1つと捉えて、その成果を積極的に取り入れようとしている⁶。聖域内においてかつては「残余」として取り扱われていた骨が、21世紀の分析手法を利用した結果、動物の種類の特異や、遺跡の年代の同定などに利用されることになっている。「動物考古学」あるいは骨に出発し、考古学による歴史の「再現」あるいはその「実験」という面に光を当てつつ、犠牲式の詳細を見てみたい。

骨と「実験」

実験考古学的な手法といえば、先史時代の人間が使用した道具などの事例が有名だろう。礫性石器と磨製石器の違い、あるいはハンドアクスとは何か、という問題を真剣に考えるならば、実際に作ってみるという選択肢が現実的だ。実験考古学には、通常2つの目的があるとされており、1つは「古代の工芸品と類似したものを作ること」で、もう1つが「そ

⁴ G. Ekroth, "What we would like the bones to tell us: a sacrificial wish list," in G. Ekroth and J. Wallensten ed., *Bones, Behaviour and Belief: The Zooarchaeological Evidence as a Source for Ritual Practice in Ancient Greece and Beyond*, Stockholm, 2013, pp.15-30. 本稿では、この書籍のデータや史料を使用しつつ、動物考古学的な視点から、「骨」と「実験」について紹介する。

⁵ REG 112, 2009, 395, no.23.

⁶ G. Ekroth, "'Don't Throw Any Bones in the Sanctuary!' On the Handling of Sacred Waste in Ancient Greek Cult Places," *Memoirs of the American Academy in Rome. Supplementary Volumes*, Vol. 13, Ritual Matters: Material Remains and Ancient Religion (2017), pp. 33-55.

のために適切な方法を見つけること」である。

古代遺物の「再現」についても、そのレベルには差異が存在する。Gods In Color と題した展覧会で、さまざまな遺物を「彩色復元」したブリンクマン⁷の試みは、色鮮やかな古代世界の可能性を示した。彩色することで彫像の知られていなかった特徴が明らかとなることは、ある大理石像が「少女か女神か」、すなわち「墓碑か本尊か」、あるいはそうではない奉納品か、といった同定の問題に新たな光を当てるものだ。反面、本来は大理石から彫り出されるはずの彫刻は 3D プリンタで復元したものを使用し、さらに最新の「非侵襲性検査」で明らかになった色彩についても、それを着色する過程では古代の手法を検討してはいないことから、「古代の遺物の再現の一つ」として、1 つ目の手法を追い求めたものだろう。

一方で、「リアーチェの戦士」に関わる羽田康一⁸らのチームによって試みられている「古代ギリシアのブロンズ彫像の鑄造」技術は、まさに古代のやり方の「再現」であり、そこで用いられた方法の確定を目指すものである。古代ギリシアの大理石彫像が発展した背景には、これらブロンズ彫像の存在が大きかったことは、すでによく指摘されていることである。「ロストワックス製法」と呼ばれる鑄造技術は、型の上に蠟を重ね、さらに型を重ねて蠟の層に青銅を流し込むため、非常に精巧な表現が可能である。大理石では表現できないような細かいおくれ毛までもが刻まれ、別鑄造で嵌め込み式の「眼球」⁹が非常に精巧であることも知られている。しかし、古くはミュケナイ時代の粘土板¹⁰でも示されているように、古代社会において「ブロンズ」は、高価で祭祀にも利用される道具でありながら、戦時には躊躇いなく溶解して武具へと再利用されるものであった。「リアーチェの戦士」のように、沈没した船の積荷として保存される事例も多い。古代ギリシア人のブロンズ鑄造を「再現」することは、上述の 2 つの目的を同時に達成しようとする革新的な仕事であると言えるだろう。

ところで、動物考古学と「骨」に関する実験は、非常に単純で経験的なものである。以下の「実験」の事例は、前掲の動物考古学の書物の紹介であり、考古学と犠牲式の関わりという観点から、新たな知見を共有したいと思う。エフェソスに伝わるアルテミス女神像は、この神の祭祀像としては、特徴的な外観をしている。胸部に多くの乳房を備えた女神の姿は、エペンデュテースと呼ばれるオリエンタルな装束と共に、この像の際立った特徴となっている。袖がなく、丈が長い、さらに動物や怪物などの模様が施された上衣エペンデュテースはオリエントの神官が着用した衣服だが、ギリシアでは神の像にふさわしいも

⁷ V.Brinkmann, R. Dreyfus, and U. Koch-Brinkmann, eds. *Gods in Color: Polychromy in the Ancient World*. Fine Arts Museums of San Francisco, Legion of Honor, 2017. <https://buntegoetter.liebieghaus.de/en/> 2022 年 4 月 14 日閲覧確認。

⁸ 羽田康一『古代ギリシアのブロンズ彫刻：総合的推論のために』（世界美術双書 013）東信堂、2008 年。
<https://www.greek-bronze.com> 2022 年 4 月 14 日閲覧確認。

⁹ メトロポリタン美術館所蔵 <https://www.metmuseum.org/art/collection/search/255977> 2022 年 4 月 14 日閲覧確認。

¹⁰ ピュロス粘土板 Tn316。

のとされた。ギリシアの「神官」は、少数の世襲制の名門出身者以外は、任期のある役人であり、壺絵に描かれるその姿も、キトーンにヒマティオンという通常のギリシア人の衣服と何ら変わらない。多数の乳房については、エフェソスでアルテミスが「メガレー・メーテール」すなわち小アジア地方の大地母神と同一視されていたため、という解釈がなされていた。

ジェラルド・サイタール¹¹は、地母神信仰で好まれた犠牲獣である牛が、アルテミスの信仰でも重要であった可能性を指摘し、アルテミスの「乳房」について新たな仮説を提示

した。すなわち、それらは儀式で殺害された雄牛の「陰囊」ではないか、というものだ。サイタールは、アルテミス像のレプリカに牛の陰囊を取り付ける「実験」を行い、自説を強化しようとした。牛の臓器を複数付けた神像は、いかにも「それらしい」姿だが、こういった仮説はそれを支持する証拠がない限り、刺激的だが説得力のないままである【図1】。

文献史料には、不確定な要素を排除する力があるだろう。では、「骨」はどうだろうか。動物考古学のデータは、エフェソスのアルテミス神域から出土した動物の骨のうち、牛は約 20%にとどまること、しかもその牛の「骨」のほとんどは雌牛であるということを示している¹²。サイタールの仮説は、「骨」からは援護されないようだ。

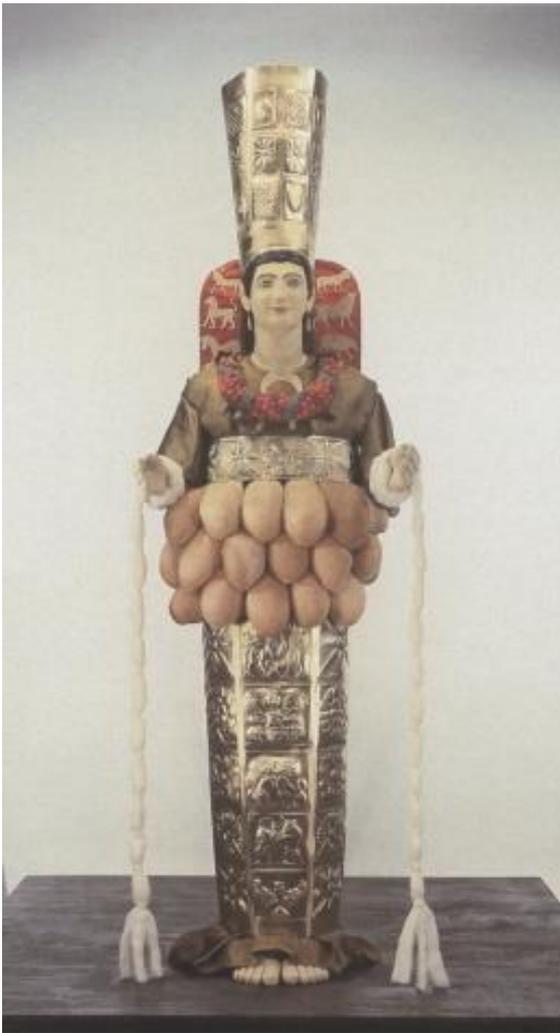


図1 : G. Seiterle, *Antike Welt* 10. 3 (1979), p. 8.

¹¹ G. Seiterle, “Artemis – Die Große Göttin von Ephesos: Eine neue Deutung der «Vielbrüstigkeit» eröffnet einen Zugang zum bisher unbekanntem Kult der Göttin,” *Antike Welt* 10.3 (1979), pp. 3-16 また、前掲書に所収の G.Forstenpointner, A. Galik and G. E. Weissenburger, “The zooarchaeology of cult: Perspectives and pitfalls of an experimental approach,” in G. Ekroth and J. Wallensten ed., *Bones, Behaviour and Belief*, 2013, pp. 233-242.が祭祀関連の実験について述べており、しばしば参照した。

¹² Id., p.240.

ヒエラ・カラ

供犠の成功を伝える時、古代ギリシア人は「タ・ヒエラ・カラ」と述べた。これは、ファン・シュトラーターテンが犠牲式を画像から検討した『ヒエラ・カラ』の書名にもなっているように、犠牲式で良い兆しがあったことを告げる定型句であった。本来「ヒエラ」は聖なるもの（ヒエロス）を示し、それが「美しい（カロス）」状態にあることを示している。直訳すると「聖なるものは美しい」だ。この「カロス」は、例えば壺絵で恋人同士が描かれる場合によく見られる言葉である。神話物語の美女や美少年と、それを追いかける神々、そして「～は美しい（～・カロス）」と呼びかける言葉が記された陶器画は数多い。端的に相手の外貌を褒め称えるようにも見える「カロス」だが、犠牲式に使われる時にはどのような意味合いなのだろうか。前4世紀のテオフラストスは、『人さまざま』において、人の性質の滑稽な特徴を批判的に描き出している。「虚栄」というテーマでは、わざわざ当番評議員（プリユタネイス）に話をつけて、市民の前で犠牲の報告を買って出る人物を取り上げており、麗々しく報告するその中でも「ヒエラ・カラ」の文言（11）が見られる。定型句のため、その文脈に合わせて「犠牲式で良いことが起きた」、「犠牲の兆しは良好です」など、犠牲を行った結果が「良い」ものであったと訳される場合が多い。しかし、ファン・シュトラーターテンも指摘するように、これは何か良いしるしが「目に入った」¹³ことを知らしめる言葉であり、明らかな指標があったことを示している。

『ヒエラ・カラ』で取り上げられる壺絵には、日常的な犠牲式をテーマにしたものも多いが、その中に「火が燃えている祭壇上にあるカーブした物体」を描いたものがある。ジェイムソンは、すでに1966年に「実験」によってこの場面を検討している¹⁴。古代ギリシアにおいて最も大型で高価な犠牲獣であった牛を用いたジェイムソンの実験では、「牛の尾」を焼くことによって、古代ギリシアの壺絵に現れる「曲がった物体」が出現することが分かった。牛の尾骨が焼かれて火の中で丸くなると、神々が犠牲を喜んで受け取ったという印となるのだ。これについてはエクロスが牛以外、すなわち羊や豚の尾でも同様に「曲がった物体」が出現することを確認している¹⁵【図2】。

¹³ F. T. Van Straten, *HIERA KALA*, 1995, p.1. 冒頭で「ヒエラ・カラ」を取り上げ、しばしば「良い予兆が出ました」という「内容」を強調する翻訳がなされることへの疑問を呈し、具体的な画像の検討を行う。

¹⁴ M. H. Jameson, "The omen of the Oxail," *Scientific American* 214.2(1966), p. 54; id., "Sophocles, *Antigone* 1005-1022: an illustration," in *Greek tragedy and its legacy. Essays presented to D. J. Conacher*, eds. M. Cropp, E. Fantham & S. E. Scully, Calgary, pp. 59-66. ジェイムソンの実験の経緯については、G. Forstenpointner, A. Galik and G. E. Weissenburger, *op.cit.*, pp. 234ff.を参照。

¹⁵ Jameson 1986, pp.60-61. G. Ekroth, "What we would like the bones to tell us: a sacrificial wish list," in G. Ekroth and J. Wallensten eds., *Bones, Behaviour and Belief*, p.20.



図 2 : G. Ekroth, “What we would like the bones to tell us: a sacrificial wish list,” in G. Ekroth and J. Wallensten ed., *Bones, Behaviour and Belief*, p.20.

アリストファネスの喜劇『平和』の「ヘー・ケルコス・ポイエイ・カロース」(1054-5) という台詞は、主人公トリュガイオスが犠牲式を執り行い、それがうまく行ったことを奴隷に告げる場面で発せられる言葉である。ケルコスは「尾」であり、尾が「カロース(「カロス」の副詞形)」になったという意味だ。トリュガイオスの「尻尾は具合がいいぞ」(佐野好則訳

16) という台詞は、まさに「ヒエラ・カラ」の具体的な言い換えであり、犠牲がうまく執り行われたことの報告であった。トリュガイオスの言葉は一聴すると意味不明だが、古代ギリシア人にとっては神々とのコミュニケーションが「成立した」ことが体感できる不可欠な要素だと指摘できる。そして、この「実験」によって、「仮説」がより説得力を持つものになったと言える。

ファン・シュトラテンは、この「曲がった物体」について、さらに検証を推し進めている。前5世紀前半のアッティカ赤絵式スキュフォスに「ペンテシレイアの画家」が描いたとされる、サテュロスに言い寄られる虹の女神イリスが手にする物体【図 3】が、おそらくジェイムソンが焼いた「曲がった物体」と同一であろうと指摘する¹⁷。

壺絵に描かれている、「焼かれる前の」物体は、その骨としての区分がより明確になっている。女神の持つ骨の根元には、2つの突起が見えており、単に尾ではなく腰部の最後の脊椎骨にあたるのが分かる。さて、「骨」のデータはこの議論に新たな知見を添えてくれ

¹⁶ 『ギリシア喜劇全集2』2008年、岩波書店。

¹⁷ F. T. van Straten, “The god’s portion in Greek sacrificial representations. Is the tail doing nicely?,” in Hägg, R. & Nordquist, G. eds., *Early Greek cult practice: proceedings of the fifth international symposium at the Swedish Institute at Athens*, 1988, pp.51-68. Id, *HIERA KALA*, 1995, V.400, Fig. 129.

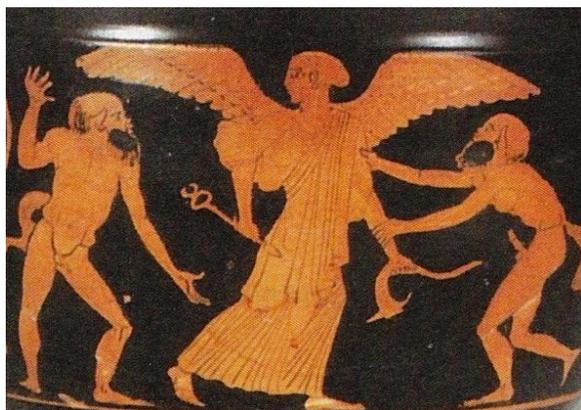


図3 : G. Forstenpointner, A. Galik and G. E. Weissenburger, The zooarchaeology of cult: Perspectives and pitfalls of an experimental approach, in G. Ekroth and J. Wallensten ed., *Bones, Behaviour and Belief*, p.236 Fig.3

るだろうか？実は先ほどのエフェソスのアルテミス神域のデータ¹⁸では、牛の腰部、尾部や仙骨と脊椎骨が炭化、あるいは石灰化したものが発見されており、まさに「骨」のデータが一連の仮説を補完してくれている。「骨」だけでは歴史像につなぐにくいのが、文献や遺物と実験的な手法によつ

て、具体的な犠牲の状況が分かるようになってきたと言えるだろう。

ジェイムソンは、祭祀に関わりのある実験的な試みをもう1つ行っている。これもまた、壺絵の図像表現にヒントを得たものだ。犠牲の様子を描く陶器画は多いが、その際祭壇を中心として、儀式を執行する神官役の男性や、その補佐となる人たちが描かれることがある。おそらく神官であるその人は、祭壇上で「かたまり」を手にはしている【図4】。この「かたまり」は、何だろうか。ソフォクレスの『アンティゴネ』1010行においては、予言者テイレシアスが犠牲獣の「胆嚢」は神々の取り分の一つであると述べており、牛の「胆嚢」が有望な候補として挙げられた。しかし、ジェイムソンが「現代の牛」の胆嚢を手にはしてみたところ、手のひらに収まるような大きさであり、小さめのバッグのように手よりもひとまわり大きく見える陶器画とは差があるように思える。



図4 : 前5世紀後半のアッティカ陶器クラテール、ルーヴル美術館所蔵 G496

現代と古代の「牛」の差も考察に入れる必要がある。古代の牛は現代の牛よりもはるかに小さく、体長1.1から1.3mほどであったと考えられる。ジェイムソンは「1000kgもある大きな牛」¹⁹の胆嚢を実験に使用しており、品種改良を重

ねた現代の家畜と古代の牛の体格には、大きな差があると考えて良いだろう。古代の小さな牛を想定するならば、もっと大きな他の部位であり、「胆嚢」ではなさそうだ。

¹⁸ G. Forstenpointner, A. Galik and G.E. Weissenburger, *op.cit.*, pp.236.

¹⁹ *Ibid.*, p. 235.

「胆嚢」に代わるものとして、ファン・シュトラーターテンはこれが「メリア」である可能性を示唆した。「メリア」とは、犠牲獣の大腿骨を脂肪で包んだものである。数十年前の犠牲研究においては、神の取り分は最もよい部分、すなわちたつぷりと肉がついた大腿骨や、最も良い肉の断片であろうと考えられていた。人間にとって最良の部分、神々も喜ぶだろうと考えたのである。しかし、犠牲の作法を文献や図像から分析すると、神々の取り分はもっと違う部分であったようだ。

ヘシオドスが伝える「メコネの神話」(『神統記』510-616)は、ゼウスとプロメテウスの対立を語りつつも、犠牲が象徴するものを説明する、祭祀の起源神話のような役割を果たしている。プロメテウスはオリュンポスの神々に先立つティタン神族であり、ゼウスと対立する立場になることも厭わず、人間の味方となる神格であった。メコネで人間と神々の犠牲式の取り分を決定するとき、プロメテウスはゼウスを「欺いた」。すなわち、「白い骨」を輝く脂肪で包み、いかにも美味しそうに見せかけたのである。神話で象徴的に定められた「神には骨、人には肉」という区分は、骨が不死なる神々を、肉は死すべき人間の運命を示しているとも考えられる。しかし、実際に古代アッティカの文筆家も、神々に供えられたのは「肉を取り除いた骨」であったと述べている。喜劇作家アリストファネスと同時代のフェレクラテースは、人間が神々に供物をする時には、「骨(オスフェス)」が完全に肉を取り除かれていることについて、神々が不平を口にしている様子²⁰を描いている。紀元前4世紀初頭の詩人エウブローソスは、「人々は神々に尾と太ももしか与えない。まるで男色家にするように」²¹と風刺し、腹部の網状脂肪に当たる部分を神々の分け前とする文言(断片94)もある。あるいはもっと古い、ホメロスの詩句においても「脂肪の二重の層」(『イリアス』1.460)という表現が見られる。メリア、つまり「肉を削いだ大腿骨を網状脂肪で二重に巻いたもの」を、今度は動物考古学から見る祭祀研究の立場から、ヴァイセンバーガーが実験的に手にすることになる。結果は、ジェイムソンの「胆嚢」よりも、ずっと壺絵の図像に近い。「実験」は、神話物語や文献に伝えられた文言が理念的な表象ではなく、非常に具体的で習慣に基づくものであったことを教えてくれるのだ【図5,6】。

煙と骨

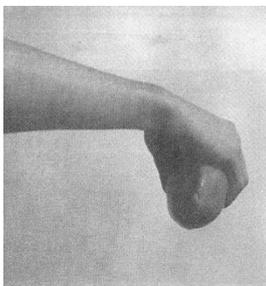


図 5,6 : G.Forstenpointner, A. Galik and G. E. Weissenburger, The zooarchaeology of cult: Perspectives and pitfalls of an experimental approach, in G. Ekroth and J. Wallensten ed., Bones, Behaviour and Belief, p.237-8 Fig.7&8

²⁰ Pherekrates fr. 28(Kassel-Austin)

²¹ Euboulos fr. 127(Kassel-Austin)

「骨」と犠牲式

古代ギリシア人は供物を捧げることを「テュエイン」することと呼んでいた。もちろん、中心的なものは動物犠牲であり、犠牲式の中で動物を殺害し、その血を盃に受けて祭壇を清め、「大腿骨」を神に捧げる。しかし、犠牲獣を捧げることのない場合、例えばチーズケーキのような菓子や、単にお香を炊き上げることもまた「テュエイン」であり、神に捧げることを指し示している。古代ギリシア人にとっては、祭壇上で「煙」をあげてオリュンポス山上の天空に住まう神々に届けることが重要であった。祭壇上で犠牲獣を、あるいは供物を焼くことは、ギリシア人の「祈願」という行動の重要な一部であったことが窺える。犠牲獣の尾、あるいは腰部から尾にかけての骨（オスフュス）を焼くことは、煙を天空に上げること、そして尾が丸まって神々が犠牲を喜んで受け取った印として非常に重要であった。「実験」の結果が明らかにするように、牛・羊・豚という古代ギリシアで最もよく犠牲に使用された動物の尾それぞれについても、焼けば同様に丸い形となる。古代ギリシア人は「尻尾はいいぞ！」と祭壇を見て喜んだ。神々と人間のコミュニケーションの成立に、「骨」が深く関わっていたと言える。

(佛敎大学・奈良大学非常勤講師)